無差別空襲受けた東海

戦後 70 年の西三河をテーマにした、ある「特集番組」に出演予定なので、毎日新聞 7 月 25 日「東海ワイド・追跡 2015」は参考になった。

70 年前、東海地方は戦場となった。米軍の空襲は、基地や軍需工場がある場所から、夏に向けて無差別に広がり、約 3 万 7000 人と言われる犠牲者を生んだ。毎日新聞と TBS の「千の証言」で寄せられたはがきなどを基に、空襲体験者 3 人を訪ねた。それぞれの口からは、震え上がるような情景とともに「戦争をしてはいけない」との願いがこぼれた。

東海地方への空襲は、1944 年 12 月から本格化した。当初、基地や軍需工場がある都市が重点的に攻撃にさらされた。だが、45 年 6 月ごろには、中小都市へと拡大、無差別化する。東海地方は広く被害を受け、約 3 万 7000 人が死傷・行方不明となった。

特に名古屋市は航空機産業の中心で、44 年末から 45 年 7 月まで繰り返し襲われた。同様に戦闘機生産工場や飛行場があった岐阜県各務原市も狙われた。また三重県は、名古屋や大阪などを空襲する際の通過点となり、帰還の際に残った爆弾を落とされるなど、早くから被害を受けた。

上記地図によると、番組に関係する自治体のなかで空襲被害を受けたのは、刈谷市・知立市・安城市・西尾市である。さらに調べていきたい。

（2015 年 7 月 27 日）